



No.30

1990年11月発行

新潟県支部報

私のフィールド

冬の柴倉ブナ林（東蒲・上川村）

渡部 通

晩冬から早春にかけて、柴倉のブナ林を歩くのが私は好きだ。夏の間はチシマザサなどが行く手を遮るかのようになり、林の中へは容易に入れない。しかし、冬から春先にかけては、これらの低木は雪の中に埋れてしまい、ブナ林全体が明るくなって見通しが良くなる。さらに雪が固くしまっていて歩きやすくなり、山の斜面、尾根などブナ林全体が自由に観察出来る場が変わってくれるからである。

自宅から柴倉部落までは車で約25分。観察用具、昼食などをザックに入れ防寒を充分にして出かける。3月に入ると平地では春の陽気が現われるものの、山地はまだ厳冬期で日中でも氷点下といった状況も少なくない。終点の柴倉からはワカン（かんじき）を履いての歩行となる。溪谷沿いの林道を進むと、ノウサギ、テン、キツネ、カモシカなどの足跡が雪上を交錯しながら林の中へ、あるいは斜面から尾根上へと続き、必然的にアニマルトラッキングの世界へと誘い込まれてしまう。足跡を追っていくうちに、斜面の窪地からノウサギが飛び出したり、尾根上を悠々と歩くカモシカの姿を見たりするなど興奮を覚える事も多かった。溪流では忙がしようにカワガラスが上流そして下流へと飛び、ミソサザイは流れるような高らかな声で歌い続ける。ブナ林が近づくと、コガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、キツツキ類などのさえずりやドラミ

ングが聞かれるようになり、中でもコガラの“ヒーフー、ヒーフー”やゴジュウカラの“フィー、フィー、ピピピピッ”の声は林全体に響き渡り、まさに光の春の到来を待ち望んでいるかのようで実に柔らかい。

ブナ林の中へ入ると、大気そのものが神々しく感じられ一層神秘性が増してくる。大きなブナの根元で休憩すると、カラ類とゴジュウカラの混群が通過し、遅れて2羽のキバシリが隣りのブナの根元近くに飛来し、らせん状に採餌しながら昇っていった。アオゲラの声が谷に響き、呼応するかのようになり頭上でオオアカゲラが“タララ……ン”を繰り返す。この他にアカゲラ、コゲラも観察されており、豊かな森林の指標鳥とされるキツツキ類が比較的多い。

そして3月下旬ともなれば、ブナ林はますます賑やかとなり、鳥たちのコーラスが林全体に響き渡る。春の陽光は、ブナの根元や日あたりの良い斜面から雪を溶かし、カタクリやイワウチワが咲き出すとブナも開葉を始め、躍動の季節を迎える事になる。

夕焼けが白銀の山全体を赤銅色に染め、充実感いっぱい下山した時、上空を2羽のクマタカが帆翔しながらブナ林上空に飛来し、全体が黄金色に見えたあの感動は忘れることが出来ない。

渡部 通 東蒲原郡津川町常浪甲

'90 シギ ウ オ ッ チ ン グ

シベリアオオハシシギの 観察記録

新潟市 渡辺 朝一

'90年4月14日、南蒲中之島町のはす田で、いつものようにツルシギを観察していました。前週341羽だったツルシギが、この日は521羽をカウントし、「急に個体数が増えたな」と感じた日でした。カウントも終わりかけ、はす田に群れて採食しているツルシギをカウントしている最中、ツルシギと同大で嘴の長い、赤褐色のシギがツルシギの群れの中で歩き回り採食しているのが目にはいりました。詳しく観察するとこれが初めて見るシベリアオオハシシギでした。黒い足、黒くて長い嘴、赤褐色の体色から識別は容易でした。

近くで同じ体型のタシギも採食していましたが、ほとんど歩き回らずに嘴を上下して採食していました。シベリアオオハシシギの採食行動はどちらかといえばツルシギに近く、活発に歩き回りながら嘴を上下して採食していました。ツルシギは、活発に歩き回ったり泳ぎ回ったりしながら嘴を水中に入れ左右に振って採食します。これに対し、シベリアオオハシシギは（ツルシギほどではないが）かなり活発に歩き回り、長い嘴を上下し、泥の中の餌を探しているようでした。足が見えなくなるような深いところにも立ち入って採食

していました。シベリアオオハシシギの採食は、歩き回るところはツルシギ、嘴を上下して採食するところはタシギに似ているといえるでしょう。

この日は所用があり、シベリアオオハシシギの観察は10分ほどで切りあげなければならませんでした。翌週22日にも観察し、写真も撮影することができました。私の知る限りではこの日が終認と思われましたが、その後上越教育大学の中村登流先生が4月26日に観察しておられることがわかりました。（これ以降に見た方は御教示ください）

本種は太平洋岸では各地に記録がありますが、新潟県においては初記録、また日本海側での記録もたいへん珍しいと思います。今回は、時間の都合であまり詳しい観察ができずに終わってしまいました。来年の渡来を期待しているところです。

春・新潟海岸で見た ミユビシギの群れ

千葉 晃

私は、本支部が主催する「県下一斉シギ・チドリ生息調査」の一調査員として、ここ約10年の間新潟市五十嵐浜を担当してきました。残念ながらあまり鳥の多い所ではなく、特に春の調査（例年4月29日）では、シロチドリ1羽とかキアシシギ2羽とか報告するのも少し恥ずかしい様な結果しか得られませんでした。今年は当日が暴風雨だったため調査を断念し、翌日浜にでてみました。天候は晴れでしたが、風がやや強く例年のようにあまり期待せずに歩き始めました。小針浜から10分程歩いた所にシロチドリが1羽、そして渚をよくみると、小型のシギが数10羽まとまってさかんに餌を取っています。ミユビシギ49羽の群れでした。この中にはきれいな夏羽（繁殖羽）の個体3羽を数えることができました。

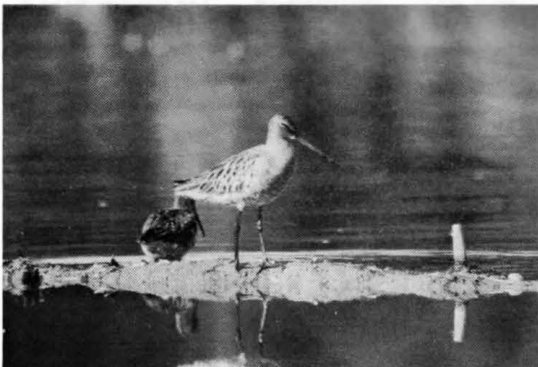


図1 中之島はす田のシベリアオオハシシギ

さらに西南へ20分ほど歩いたところでシロチドリ3羽と別のミュビシギ1群31羽(夏羽4羽を含む)を見る事ができました。合計80羽のミュビシギを観察したことになります。新潟海岸では、秋の渡来数が多く、年によっては厳冬期でも30-50羽の群れをみることが出来ます。しかし、初夏のこの時期にまとまった群れをみるのはこれが初めてでした。過去6年間の調査結果(本誌No.25 p.10)を参照すると、本種の春の平均観察個体数は6.7、秋のそれは96.5とあります。今年の春の「幸運」をもたらしてくれたのは何だったのでしょうか? 私にはそれが「春の嵐」だったように思われてならないのです。

再び会えるか

セイタカシギ!!

坂井 三夫

私は水辺のある環境が大好きだ。したがって水辺に集まってくる鳥たちも好きだ。春と秋の二回、渡りの途中に立ち寄ってくれるシギ・チドリを観察するのが毎年の楽しみにしている。シギチの仲間にはいつも悩まされる。識別が大変にむずかしい鳥だからだ。そこへゆくとセイタカシギはありがたい鳥だ。私のように鳥に対してまだ知識、経験の少ないものでもすぐにわかるからだ。このありがたい鳥、セイタカシギとめぐり会ったのは1990年4月12日私のフィールド五十嵐川でだ。五十嵐川は下田村、三条市を流れて大河、信濃川に合流する。信濃川のような広い河川敷もないので出現する鳥はそんなに多くない。でも春、秋の渡りの時季にひょっとしたら今まで見られなかった数少ない鳥が立ち寄ってくれるかも知れない。そんな楽しみも一つあり、期待を持って観察している私のフィールドの



図1 五十嵐川に飛来したセイタカシギ

一つである。五十嵐川の市街地に近いところは、御多分にもれず開発が進み自然が少しずつ失なわれている。毎年、立ち寄ってくれたノビタキも新しい橋をつくる工事のため今年はだいぶ上流でみられた。四月の上旬、天候の良い日を見はからってノビタキの写真を撮りに五十嵐川へ出かけた。いつもだったらハマシギ、イソシギ、タシギ、イカルチドリくらいしか見られない場所に今日は足の長いスマートなお客さんがいるではないか。その鳥は図鑑とにらめっこするまでもなく、すぐにわかる鳥セイタカシギだった。まさか夢ではないだろうな。セイタカシギ、お前は私をからかっているんじゃないだろうな。どうしてお前がここにいるんだ、わざわざ千葉の干潟まで出かけて行った時にはいなかったじゃないか・・・など、浅瀬で長い足を折り曲げるような動作で餌をとっているセイタカシギを見ながらいろいろなことを思った。それは早朝の出来事だったが、朝日をバックにしたセイタカシギの美しさに魅せられた私は、しばし時間のたつのも忘れていた。

セイタカシギが訪れてくれた、この小さな浅瀬近くは今は埋め立てられた。この秋そして来春はどうなるのだろうか。この五十嵐川で再びセイタカシギにめぐり会えるのだろうか。このようにシギ、チドリの生活の場である水辺の環境は悪化し、鳥たちは追いつめられている。鳥たちがいつまでも安心して立ち寄ってくれる自然環境を残して欲しいものである。

大河津分水にセイタカシギ の群れ飛来

小林 茂樹・渡辺 央

4月29日は、春のシギ・チドリ一斉調査の日である。この日、荒れ模様の天気の中で大河津分水を調査していた筆者の一人小林は、中之島町側の水田に9羽のセイタカシギと、11羽のチュウシャクシギの群れを発見した。2日後の5月1日の早朝に現地に行くと、まだ9羽そろって同じ水田で採餌していたが、チュウシャクシギの数は13羽になっていた。その後、このセイタカシギは翌日の5月2日までここに滞在したようである。

9羽のセイタカシギはほぼ夏羽に変わっていたが、そのうち6羽は完全に雄と思われる羽色をしており、残りの3羽は背面がやや褐色を帯びた雌タイプの個体であった。図鑑によれば、若鳥も背が褐色を帯びる点で雌と似ているが、次列風切羽の羽縁が白いという特徴がある。9羽にはいずれもこの白線は認められなかった。

9羽はいつも一緒に行動しており、田植が

終わったばかりで水が張られた水田では、あのサンゴ色の長い脚を使って水に入り盛んに採餌していたが、そのうち小さなヒルの様なものを採っているのを数回観察した。農作業の人が近くに来たときなどには、9羽が一斉に飛び立ち、一群となって上空を舞い、再び水田に降りたり、また、堤防を越えて信濃川の中州に出ることもあった。水田ではいつも道路脇のこの水田だけを利用し、他の水田に行くことはなかった。

さて、セイタカシギは1975年以来、愛知県や千葉県で繁殖が確認され、これらの地域ではすでに留鳥となっている地域もあるが、本県への飛来はまだ迷鳥の域をでない。県内ではこれまで6例の報告があるが、信濃川では長岡市に次いで今回が2度目である。これまでの記録を見ると、4月下旬から7月上旬までの間に飛来がみられ、特に5月に多い。飛来数はいずれも1羽で、複数が観察されたのは今回が初めてである。それにしても今回の記録は、9羽という飛来数から考えて、やはり渡り途中の悪天候がもたらしたものであろうが、本種の渡りのルートや行動を知る上で貴重なものといえる。



図1 大河津分水に飛来したセイタカシギの群れ

大河津分水に

クロツラヘラサギ

小林 茂樹

90年7月29日、与板橋から大河津分水可動堰のほぼ中間にある信濃川左岸寄りの中州にコサギ・カルガモに混じって1羽のクロツラヘラサギを見つけた。クロツラヘラサギは、杓子状の嘴を背中に乗せて、翼の中に埋めて休んでいることが多い。それでも時折、嘴を2/3位まで水中に入れて歩き回る採餌行動も見られた。この個体の翼の先端には、黒い部分があることから若鳥と思われる。体全体が真っ白なので、嘴が見えないとコサギと間違えそうだが良く見るとコサギより一回り大きく、骨格もガッシリとして脚もずっと太い。この中州は、コサギ、カルガモ、マガモ、コガモ、ダイサギ、アオサギ、ゴイサギ、ケリ、ユリカモメ、セキレイ類などが、羽を休めたり採餌をしたりしている。しかし、この鳥たちの安全地帯も一度水位が上がれば、消えてしまう不安定なところでもある。クロツラヘラサギは、30日にも見られたが翌日には姿を消し、8月12日になって再び同じ場所に現れた。その後もずっと滞在していたが、28日午前5時半頃馬越島付近の浅瀬にいたクロツラは、突然、上流に向かって飛び立った。その飛翔は、嘴と首をまっすぐ前に伸ばしサギ類よりは力強い羽ばたきに見えた。これで見納めかと思われたが、9月9日に再び現れた。尚、クロツラヘラサギの夏期(本県)の渡来は、1981年7月10日1羽が鳥屋野潟で記録されている。

文献

- ① 野鳥の図鑑 中村登流著 保育社
- ② フィールドガイド日本の野鳥
高野伸二著 日本野鳥の会
- ③ 原色日本鳥類図鑑 小林桂助著
保育社

第36回日本野鳥の会
全国大会に参加して

塚野 金松

この度第36回日本野鳥の会全国大会が日本で一番水深が深く、そして水がきれいな湖田沢湖の湖畔のサンライズホテルで6月16日(土)～6月17日(日)の日程で開催されました。新潟県支部からは渡辺範雄氏、山谷正喜氏、熊木高志氏、高橋信二氏と私の五名が参加しました。

6月16日は天候に恵まれず期待していた駒ヶ岳探鳥は駒ヶ岳8合目駐車場付近の植物観察だけでした。田沢湖町の花コマクサはお話をお伺いするだけで、実物の観察は出来ませんでした。ハクサンチドリが車道脇に沢山みられました。又、ベニバナイチゴも非常に多く目につきました。十和田八幡平国立公園南端の名山で、珍しい火山地形と、勝れた展望や国の天然記念物に指定されているイヌワシや高山植物等は悪天候のため観察不可能で、残念でしたが致し方ありません。

駒ヶ岳探鳥の代替に、田沢湖町郷土史料館の見学では、昔田沢湖で使用された漁具や今は幻の魚となったクニマスの標本等を見学。そして、日本で一番深く(水深423.4m)水がルリ色できれいだといわれているが、今はほとんど魚の生息が見られない田沢湖を一周(周囲約20km)して、辰子姫像を見学、その伝説を聞くなどして12:00頃大会会場で受付を済ませ、定刻まで休息。その間に私は集めた約70名分の「カスミ網密猟を根絶するための署名簿」を保護部長の中村竜男氏にお届けしたり、展示物の見学をしたりして開会を待っていました。

定刻、総務部森下強氏の司会で開会し、黒田長久会長の挨拶、日本野鳥の会秋田県支部長佐藤公生氏の歓迎の挨拶と続き、来賓の秋田県知事、田沢湖町長、白神山地の保護に実

績を上げた秋田県自然保護団体連合の鎌田孝一氏から歓迎の挨拶の後、環境庁野生生物課長他多数の方々からの祝電の紹介がありました。

つづいて秋田県支部から「駒ヶ岳のイヌワシを守れ」の緊急アピールが行われ採択されました。

イヌワシの営巣地に隣接した貴重な森林を伐採して、スキー場やゴルフ場を建設すれば、警戒心の強いイヌワシは能登のトキ、佐渡のトキの様に、繁殖を放棄させる恐れがあると思う。人類だけの地球ではない、食物連鎖の頂点に立つワシ、タカ類、天然記念物のイヌワシの生息地・営巣地付近の自然環境の保全を計るべきではないかと思いますが、どうなのでしょう。

野鳥保護制度のお堅いお話しから、スライド上映「秋田の鳥と自然」ではそのすばらしさに目を見張り撮影に当たられた秋田県支部の会員の御努力と熱意に最敬礼。

お楽しみコーナー「野鳥ビンゴゲーム」では、トップ賞には黒田会長から会長のサイン入りの「フィールドガイド日本の野鳥」の拡大版がプレゼントされました。

大会宣言採択の後閉会。正面玄関前にて記念撮影後、夕食。懇親会では黒田会長の就任を祝って秋田県支部が準備した地もとの銘酒の樽の鏡開き。懇親会後大会恒例のオークションでは、青森県支部の針生倅吉氏の絶妙の司会で笑いの渦、売上は35万200円とか、又同氏は第40回大会を青森に招きたいのでオークションの司会をお手伝いするのだといった。

体調が不十分のため以後の分科会は失礼して就寝して、17日の早朝探鳥会に備えた。早朝探鳥会では杉の植林地が多いためか出現した鳥は意外に少なかったと思う。杉はウラスギ系統の杉が多かった様であった。

エクスカーションは八幡平・大沼でも雨に妨げられて八幡平は中止。後生掛温泉でホシガラスがみられるらしいとの期待があったが

出現せず、泥火山や硫気孔植物だそうですがイソツツジを観察することができました。

18日、再度八幡平の探鳥に備えて宿周辺の散策に止めて休養。18日の早朝探鳥ではハリオアマツバメ・ヒガラ等を観察。八幡平探鳥ではアスピーテ（楯状火山）を観察し、鳥では八幡平へのバス（2台4・5号車）5号車の中でコマドリの囀りを聞いた方もあったとか？私はビンズイ・カヤクグリ・ウソ・メボソムシクイ等で、ホシガラスは見た人と見られなかった人があった様でした。私は後者でした。

八幡平山頂の駐車場から盛岡に向かうバスの窓から、夥しい数のアオモリトドマツの立枯木が見られたが、火山からの噴気に含まれる酸性の強いガスの害により枯死したものとか。

私は従来自分の居住地近辺の鳥に重点をおいてきたが、こうゆう会の行事に参加して県外の鳥の観察も大切であると痛感しました。今年は金沢での全国野鳥の保護のつどいにも参加出来たし、野鳥の会全国大会にも参加出来て楽しく勉強出来たので、健康を現状で維持出来て、タンチョウが確実に観察されるようであれば、来年はタンチョウサクチュアリー北海道鶴居村で行われる予定だそうだから又出掛けるかも？。

緊急アピール

駒ヶ岳のイヌワシを守れ

J R 東日本「田沢湖リゾート
開発基本計画」に反対する

J R 東日本旅客鉄道株式会社は、田沢湖地域において展開する「田沢湖リゾート開発基本計画」を策定し、去る5月25日付けをもって秋田県及び田沢湖町に提出した。

— 猛 禽 シリーズⅦ —

チ ョ ウ ゲ ン ボ ウ

風 間 辰 夫

チョウゲンボウは、数年前まで長野、山梨、栃木、宮城等の崖、絶壁に繁殖し、特に長野県の十三崖の繁殖地は国の天然記念物に指定され有名であった。それが自然開発等繁殖地付近に人間が入りこんだため、現在は殆んど繁殖していない。

夏は主として亜高山帯を中心に生息し、秋から冬にかけて平地に漂行していたわけである。

新潟市を中心に住んでおられる本会の会員諸氏はすでに御存知のように、現在日本で最も多くの本種が繁殖しているのは、新潟県である。

ツバメ、ムクドリ、ドバトと同じように都市の鳥となりつつあるわけである。

・ 生息状況

新潟市を中心に新幹線の橋脚及び学校等に10～15番繁殖している。新潟県で初めて繁殖が確認されたのは、5～6年前で黒埼町の小学校校舎であった。その後新幹線の燕三条駅の橋脚に繁殖したが、平成2年度は5月下旬から8月中旬までの間に、愛鳥センターへ8羽が持ち込まれ、そのうち7羽は巣立ち前後の幼鳥である。保護された場所は、新潟市4羽、豊栄市3羽、小出1羽となっている。

私がある雑誌の拙文を書くため、新潟市内から燕三条駅までの新幹線橋脚を調査したところ、13か所に巣を作った跡が見られ、観察した幼鳥は新潟市内で8羽、黒埼町で3羽、燕三条駅付近で4羽であった。

・ 食性

これまた最近新潟市を中心にふえたアブラコウモリ、ホオジロ、ムクドリ等を捕食して餌としており、格好の生息地となったものであろう。他にツバメ、スズメ、ハタネズミ、そして昆虫類もかなり多く食べている。

・ 保護された状況

新潟駅で建物に衝突して保護されたほかの7羽はすべて、巣から落下もしくは、巣立したものの親鳥にはぐれ、餌がとれず“栄養失調”になったものである。

人間に発見されずにそのまま落鳥した個体もかなりあると判断される。

・ 標識放鳥

8羽のうち、5羽は元気になり自然へ復帰しても大丈夫生きていけると判断されたので1990年8月3日、紫雲寺の愛鳥センターから環境庁のリングを付けて放鳥した。

・ 都市の鳥として今後どうか

山の鳥から都市の鳥として長く生息することが出来るか、どうか私なりに考えてみると次のようになる。

＊ 人間に歓迎されるかどうか—— 営巣場所、餌ともに、歓迎される条件が揃っている。すなわち、営巣場所は人家でなく、新幹線の橋脚や、小・中・高校の建物であり、餌は人間に嫌われている、アブラコウモリ、スズメ、ムクドリを多く食べており、人間が生活して行く上に少なからず害性を及ぼす種類を退治してくれている。

飛んでいる姿もすばらしいし、特に顔がダルマに似ていて猛きん類に似合わず非常に可愛らしいといわれている。

＊ 他の猛きん類との関係—— 本種が生息している付近に普通に見られるトビ、ノスリ、フクロウ、トラフズク、オオコノハズク等とは餌とする種がちがっておりお互いに影響はないと思われる。

＊ 今後長く住みつくか—— 餌となるべき種類がいなくならない限り長く住みつくと考えられる。

“皆さんとともにチョウゲンボウをあたたく見守ってやりたいと思う。”

◎ダルマ顔新幹線を友として

新潟県の主な河川におけるセキレイ類3種の分布調査(I)

— 三 面 川 —

渡 辺 央

はじめに

ハクセキレイはかつて北海道と東北北部だけで繁殖し、本県などには冬鳥として渡来していたが、その繁殖地が次第に日本列島を南下し、今では本州中部地方にまで広がっている(中村, 1985)。このようなハクセキレイの繁殖地の拡大は、私たちに二つの興味ある問題を提示している。一つは、私たちにはなかなか見る機会が少ないこのような分布の拡大が、はたしてどのような形で行われて行くのかということ、もう一つは、ハクセキレイの新たな侵入に伴って、従来から河川流域などに生息しているセグロセキレイやキセキレイとの関係がどうなるのかという点である。特に近縁種であるセグロセキレイとの関係が注目されている。

ハクセキレイの繁殖地の拡大は、東北北部から次第に海岸沿いに南下してきたことが指摘されている(中村, 1985)が、本県においても最初に繁殖が確認されたのは県北部の山北町で、その後、佐渡、粟島、加治川村、新潟市というように北から順にその足取りを追うことができる。そして、海岸部に定着したハクセキレイは、やがて大きな河川などに沿って徐々に内陸部へと繁殖地を広げるらしい(中村, 1986; 鳥海, 1987)。これまで明らかにされたこのようなハクセキレイの繁殖地拡大の仕方を見ると、長い海岸線を有し、しかも北から三面川、荒川、胎内川、阿賀野川、信濃川、鯖石川、関川、姫川など、いずれも日本海に河口を持つ河川が多く分布する本県は、上述のような問題を考える上で大変恵まれた地域であるといえる。そこで私は、1987年から県内の主な河川でハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイの分布を調べて

表1. 三面川におけるセキレイ類3種の出現状況と繁殖確認数

	出現回数	出現個体数	繁殖確認数
ハクセキレイ	10	15	2
セグロセキレイ	8	11	4
キセキレイ	5	8	0
合 計	23	34	6

いるが、詳しく調査するにはとても一人では無理である。幸い本支部でも一昨年から多くの会員の協力を得ながら、県内のセキレイ類の分布調査を行っている。今回はそれらの資料とする意味もあり、1990年の繁殖期に調査した県北の三面川の結果を報告したい。

三面川のセキレイ類の分布

三面川は、朝日連峰に源を発し、村上市と朝日村の中央部を流れて日本海に注ぐ全長50 kmの1級河川である。サケの遡上する川として、また、アユの豊かな川としても知られている。河川形態は、細かい区分は別にして、調査した河口から朝日村千縄集落までの約15 km間は、景観的にはほとんど中流域である。

調査は1990年5月2日に、車を使ってゆっくりと河口から上流に向かって進み、途中で観察されたセキレイ類3種の出現地点、個体数、環境などを記録したが、特に営巣場所としてよく利用される沿岸の下水処理場、生コン工場、砂利採取場所などでは、20分間の定点調査も合わせて行った。

調査の結果、三面川にはハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイの3種とも分布しており、その出現地点、出現個体数、繁殖の確認などは表と図に示した。

各種の出現回数と個体数は、ハクセキレイ10回(15羽)、セグロセキレイ8回(11羽)、キセキレイ5回(8羽)である。そのうち繁殖場所が確認できたのは、ハクセキレイ2か

所、セグロセキレイ 4 か所で、キセキレイでは確認できなかった。それらの営巣場所を見ると、ハクセキレイは河口の海岸にある船置き小屋とコンクリートブロック工場に、また、セグロセキレイはアスファルト工場、コンクリート工場、資材小屋、倉庫にそれぞれ営巣していた。

次に 3 種の出現地点を見ると、わずかに下流域の景観をみせる河口近くではハクセキレイだけが観察されたが、その出現回数は多くなかった。市街地が迫る下渡大橋から上流はすでに中流域の景観になるが、水明橋付近まではまだハクセキレイの出現回数が多く、この付近から姿を見せるようになったセグロセキレイのそれを上回る。しかし水明橋から上流では、高根川沿いの砂利採取工場と水田で、それぞれペアと思われる 2 羽ずつで出現したものの、三面川本流では観察されなくなった。そして、セグロセキレイのみが出現するようになったが、河口から約 9 km さかのぼった岩沢橋付近では、セグロセキレイの他にキセキレイが出現するようになり、さらに上流の布部橋付近まで行くと、セグロセキレイよりもキセキレイが多くなった。そして、セグロセキレイはそれより上流では観察されなく

なり、キセキレイのみが出現した。つまり 3 種の分布は、河口から上流に向かうにつれて、(ハクセキレイ) → (ハクセキレイ + セグロセキレイ) → (セグロセキレイ + キセキレイ) → (キセキレイ) という変化が見られる。三面川におけるこのような分布形態は、信濃川の場合とほとんど同様で、ここでも 3 種がそれぞれの生活環境を選択して分布している結果といえる。

当初、三面川は本県の最北部の方に位置することから、ハクセキレイの侵入が早い時期に起こったと想像されたため、ハクセキレイの勢力がもっと全域に及んでいるのではないかと予想したが、今回の調査ではそのような傾向は認められなかった。

文 献

- 中村一恵 (1985) 日本列島におけるセキレイ属近縁 2 種の地理的分布の変遷 (予報), 神奈川県博研報, 16, 23-36.
- (1986) 2 種のセキレイの分布境界域における 15 年間の変化。神奈川自然誌資料, 7, 1-14.
- 鳥海隼夫 (1987) 山形県内陸部におけるハクセキレイの繁殖記録。東北の自然, 36, 7-9.

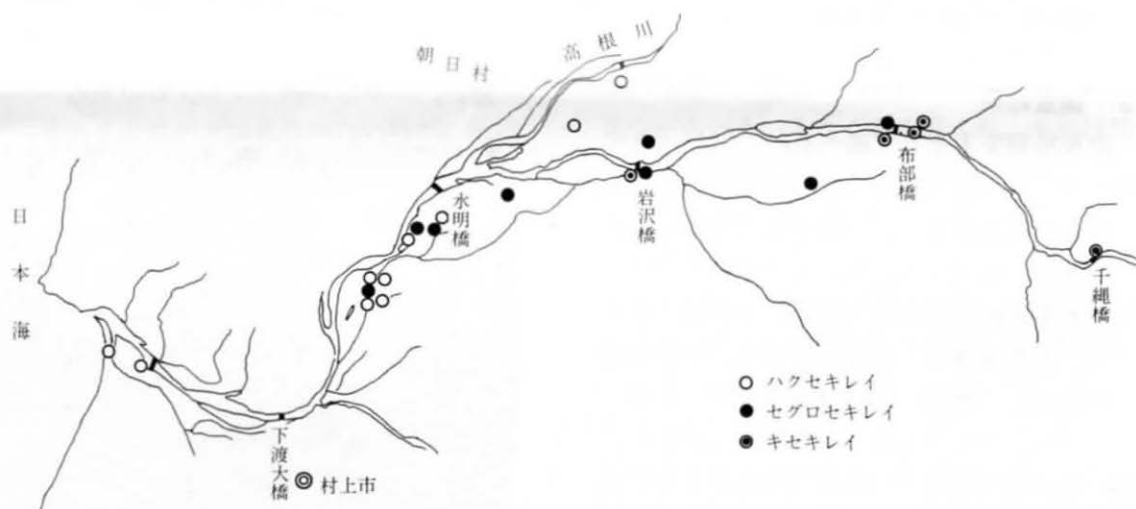


図1 三面川におけるセキレイ類の出現地点

菅名岳鳥類調査中間報告

小野島 学・山本 明・渡辺 範雄

1 はじめに

当支部では、自然環境保全活動の一環として、昨年度から巻機山鳥類調査を実施しているが、本年度は、手軽なハイキングコースであり、しかも県内有数のブナ林を有する菅名岳もその対象に加え、春に第1回の調査を実施したので、その概要を報告する。なお、本調査は「菅名岳の自然を守る会」と合同で実施した。

2 調査の概要

(1)調査期日：1990年6月8日4:50-13:00

(2)調査方法：観察は主に双眼鏡を用い、ロードセンサス法(片側50m計100m幅)で姿および鳴き声を確認した。

(3)調査員：小野島学、渡辺範雄、山本明、林公史(菅名の自然を守る会)、堀川大輔

(4)調査ルート：往路は、林道のゲートから始め、林道の終点から登山道を経て山頂まで。帰路は、往路の登山道を山頂より「ツバキ平」までおり、そこから急坂を沢に下り溪流沿いに登山道の出会いまで下った。以下ゲートまでは往路と同じ。

3 調査結果

出現鳥類を主として述べる。

- (1) ゲート(始点)から登山道を尾根沿いに登る分岐点までは、沢筋の林道で杉の植林が続く、ヒヨドリ、ホオジロが多く、ヤブサメも比較的多くみられた。その他ウグイス、カワガラス、シジュウカラ、カケス等が出現し、帰路、この他にサシバ、トビ、コゲラ、サンショウクイも観察された。
- (2) 登山道尾根筋への分岐点から頂上までは、広葉低木樹林が続く、後半からはブナ林を中心とした林木に変わり、ヒヨドリ、シジュウカラ、ヒガラが多くみられ、次いでウ

グイス、キビタキを中心にアオバト、オオアカゲラ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、オオルリ、コメボソムシクイ、エナガ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケス等が出現した。オオアカゲラ、キビタキ、ヒガラ等は、ブナ林を好む鳥類で、菅名岳にはまだ多くのブナ林があるためであろう。また、ホトトギス科の4種類全てがみられることも自然の豊かさを物語っている。

- (3) 帰路の「ツバキ平」から西側に降りた沢筋は、溪流沿いにブナ、カツラ、トチ、イタヤカエデ、サワグルミ等が原生林に近い林相を呈し、ミソサザイ、ゴジュウカラが多く、アカショウビンの声も聴かれた。他にクロツグミ、コゲラ、オオルリ、ヤマガラ等がみられ鳥相の多さが感じられた。

以上、第1回の調査では、17科31種の鳥類が観察された。本稿では出現鳥類を中心に述べるに留まったが、他にも猛禽類等生息が推定される鳥類も考えられるので、今後の調査に期待し、いずれ報告の機会を得たい。



巨木もある貴重なカツラの自然林(菅名岳)

印象に残る上川村柴倉の探鳥会

～90年度総会・探鳥会の報告～

山 本 明

'85年以来2度目の東蒲上川村での開催となり、総会は5月19日セミが平の「あすなろ荘」で行われた。総会に先立って役員会が開かれ、主として4月末保護部から提起されている新潟市太夫浜のゴルフ場開発の反対運動について、支部としての取り組み方を協議し総会にはかることになった。

総会には'89年度の事業報告と決算報告を原案通り承認した後、'90年度の事業計画と予算を審議した。配られた原案について質疑応答のあった後、一部修正して議決、予算案は原案通り議決した。

次いで新潟太夫浜のゴルフ場問題については、先程の役員会の協議を踏まえ、これまでの経過説明と今後の取組みについて討議した。運動を進める方向で活発な意見が出されたが、

- (1) 当面事業主体の佐藤工業および県には、早急にゴルフ場開発の見直しを要望する文書を声明文と共に手渡す。これには支部長をはじめとする三役が当る。
- (2) 今後の進展では本部の支援も得ながら、運動を進めてゆく。
- (3) オオタカの生態についても地元の観察者の協力も得て調査を進める。

ということになった。

最後に役員改選の件では、現役員全員の留任が承認された。(別掲)

夕食後の研修会では、地元の渡部通さんのフィールドで、その一部が明日の探鳥地となる柴倉国有林のブナ林の四季と、そこに棲む鳥の生態をスライドで写された。上川村長賞を受けたというすばらしいスライドであった。

翌朝の探鳥会は4時半宿を出発して柴倉国有林のブナ林へ。林道のゲートを借用のカギであけ奥へ奥へと走ったが、探鳥地の道路の両側はかなりの広さで伐採されていた。かつてはうっ蒼と茂るブナ林だったと思われるが、今は1, 2ヶ所に少しばかり固めてブナの木が残されていた。沢筋や上部の方はまだ残されているので、鳥は結構多かった。アカショウビンやキビタキの声もきこえてきた。

伐採された所の峯の方へ登って、谷の向うに連なる山脈の景観はすばらしい眺めであった。御神楽岳は遥か彼方に雲がかかっていたが、御前が遊屈などの名勝地も見えた。下におりて、近くの木に止っているオオアカゲラ(多分幼鳥)の姿をみんなでじっくりプロミナーで見ることができた。オオアカゲラはブ



柴倉国有林での
探鳥会
(ゴジュウカラに
見入るグループ)

ナ林に棲む鳥だ。帰り路でキビタキの美しい姿や、ゴジュウカラの枯木での動き、またコサメビタキがこれから営巣する場所を決めて、巣造りを初める行動も観察することができた。

過去3年支部総会の探鳥会は雨にたたられたが、今年は4年振りに天候にめぐまれ、印象深い探鳥会であった。

〔兩日にわたる出現種〕オシドリ(生息)・トビ・サシバ・キジバト・カッコウ・ツツドリ・ヤマセミ・アカショウビン・アオゲラ・オオアカゲラ・ツバメ・キセキレイ・セグロセキレイ・サンショウクイ・ヒヨドリ・ミソサザイ・トラツグミ・クロツグミ・ヤブサメ・ウグイス・メボソムシクイ・センダイムシクイ・ヒヨドリ・キビタキ・オオルリ・コサメビタキ・コガラ・ヒガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・メジロ・ホオジロ・カワラヒワ・イカル・スズメ・ムクドリ・カケス・ハシボソガラス・ハシブトガラス(39種)

なお今回の上川村開催は、津川町の渡部氏(前本支部事務局長)のお世話の賜である。

〔支部役員〕支部長—大島基、副支部長—千葉晃・山本明、事務局長—石部久、事務局次長—小野島学、幹事—岡田成弘・木下弘・小池重人・小林成光・白井康夫・桑原哲哉・高橋秀恵・本間由紀子・吉井進・渡辺範雄・渡辺央・渡辺弘雄、監事—小松吉蔵・山谷正喜〔業務分担〕会計—本間、指導部—吉井・渡辺(弘)・白井・岡田・高橋、保護部—山本・渡辺(範)、調査研究部—小野島・木下・小池・渡辺(央)、支部報・鳥だより編集部—渡辺(央)・山本・千葉・桑原(旧姓滝上)

カスミ網による密猟根絶のために一般販売禁止法例化の請願署名を!!

すでに行った方も大分おられると思いますが、まだの方は「野鳥」誌本年5月号添付の署名用紙を使って、11月末までに本部の方に送って下さい。私たち1人1人のささやかな取り組みが大きな力となってゆきますので、是非お願い致します。

(保護部)

原稿募集

次号は「私の好きな鳥・思い出の鳥」というテーマで、ご投稿による特集を組みたいと思います。そうした鳥に対する思いを綴って是非お寄せ下さい。400字原稿用紙2枚前後(多少長くても、写真添付も可)。12月末頃まで編集担当の下記へお送り下さい。

上越市東城町3-5-51 山本 明

発行	1990年11月20日	No. 30
発行人	大島基	
編集者	渡辺 央・吉井 進・本間由紀子	
事務局	日本野鳥の会新潟県支部 〒950-21 新潟県新潟市五十嵐西15番地38号 電話 025-261-1416 石部 久 振替 新潟1-6002	